

令和元年度資源評価報告書(ダイジェスト版)

[Top](#) > [令和元年度資源評価](#) > ダイジェスト版

標準和名 ゴマサバ

学名 *Scomber australasicus*

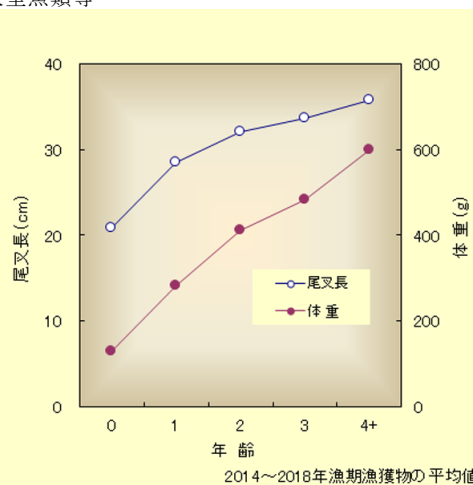
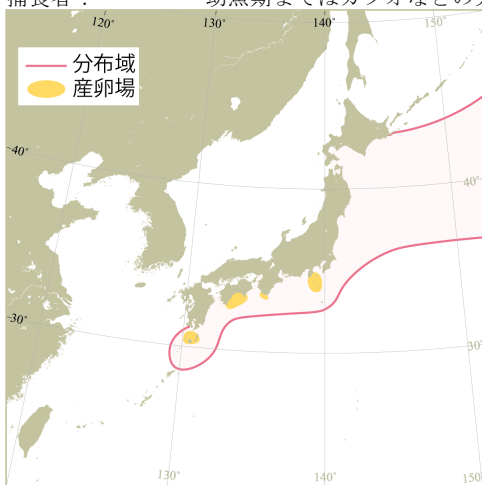
系群名 太平洋系群

担当水研 中央水産研究所



生物学的特性

寿命： 6歳程度
成熟開始年齢： 2歳 (100%)
産卵期・産卵場： 12～翌年6月、伊豆諸島周辺以西の黒潮周辺域
食性： 仔稚魚期には浮遊性甲殻類、イワシ類のシラスなど、幼魚期以降は浮遊性甲殻類、小型魚類、イカ類など
捕食者： 幼魚期まではカツオなどの大型魚類等

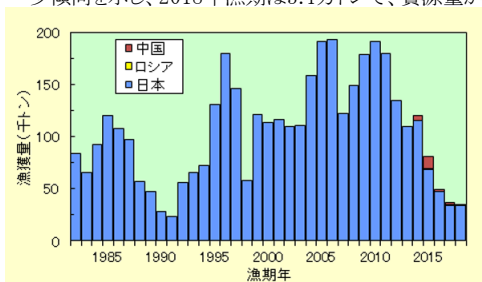


漁業の特徴

まき網漁業(大中型・中型)、火光利用さば漁業(たもすくい・棒受網漁業)、定置網漁業、釣漁業によって漁獲される。漁場は陸棚上から陸棚縁辺、及び島しょ周辺や瀬などに形成される。まき網漁業と火光利用さば漁業では主に若齢魚、釣漁業では高齢魚の割合が高く、定置網漁業では時期や海域によって組成が大きく異なる。漁業種別漁獲量はまき網漁業が最も多い。

漁獲の動向

1982年漁期(7～翌年6月)以降の我が国の漁獲量は、1995年漁期に10万トンを超え、2006年漁期に19.3万トンと過去最高となった。その後も高い水準を維持し、2010年漁期に19.1万トンと高い値を示した後、2011年漁期以降は減少傾向を示し、2018年漁期は3.4万トンで、資源量が推定可能な1995年漁期以降では最も低い値となった。

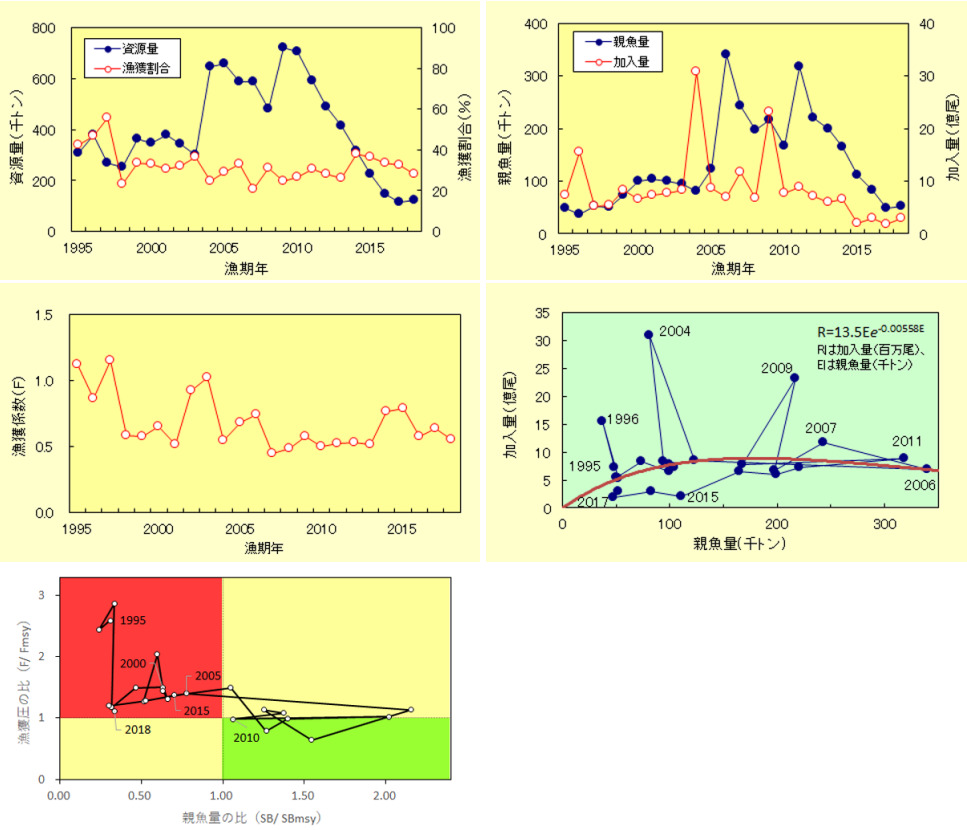


資源評価法

1995～2018年漁期の資源量を、7～翌年6月の漁期を年単位として、4歳以上を最高齢グループとする年齢構成の年齢別漁獲尾数を使ったコホート解析により推定した。最近年の漁獲係数(F)は、加入尾数を静岡県棒受網資源密度指数に、親魚量を標準化産卵量に適合させるチューニングを行って推定した。自然死亡係数は0.4とした。

資源状態

資源量は1996、2004年漁期の卓越した高い加入量によって、30万トン前後から2004年漁期以降は60万トン前後に増加した。さらに2009年漁期の高い加入量によって2009・2010年漁期の資源量は70万トン以上の高い水準にあった。2011年漁期以降、資源量は著しい減少傾向を示し、2018年漁期は12.4万トンであった。親魚量は資源量と同様の変動傾向を示し、2006～2014年漁期は17万トン～34万トンの比較的高い値で推移したが、その後は減少傾向を示し、2018年漁期は5.3万トンであった。漁獲係数(F)は、1995～1997年漁期、2002・2003年漁期に高い値を示した他は比較的稳定した値を示している。再生産関係にはリッカー型を適用した。最大持続生産量(MSY)は10.5万トンと推定された。MSYを実現する親魚量(SBmsy)は15.8万トンで、2018年漁期親魚量はこれを下回っており、SBmsyに対する2018年漁期の親魚量(SB2018)の比は0.33である(SB2018/SBmsy=0.33)。2018年漁期のFはMSYを実現する漁獲圧(Fmsy)を上回っており、Fmsyに対する2018年のFの比は1.09である(F2018/Fmsy=1.09)。親魚量の動向は近年5年間(2014～2018年漁期)の推移から減少と判断される。



資源評価のまとめ

- 2018年漁期の資源量は12.4万トン、親魚量は5.3万トン
- 2018年漁期の親魚量はSBmsy (15.8万トン)を下回っている(SB2018/SBmsy=0.33)
- 2018年漁期のFはFmsyを上回っている(F2018/Fmsy=1.09)
- 親魚量の動向は近年5年間(2014～2018年漁期)の推移から減少と判断される

執筆者: 由上龍嗣・井須小羊子・上村泰洋・古市 生・渡部亮介・金森由妃

上記の再生産関係はMSYを実現する親魚量および漁獲圧を算出するため、研究機関会議での検討を踏まえて提案したものである。

資源評価は毎年更新されます。